
こころを求め

穂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こころを求め

【Nコード】

N1045Y

【作者名】

穉

【あらすじ】

桐島碧斗はや。ザの抱える殺し屋だったがある日、仲間の裏切りにより死んだが恨みを抱くことは無かった。彼には心がなかった。目覚めたのは真っ白い部屋だった。そして目の前に居た少女に「つまらない人生ね」そういわれたのだった。そしてちいさい頃やった事のあり今でもちよくちよくやっているポケモンの世界でゾロアークに転生させられることになったのだった（ゾロアからです）

ぶろろーぐ

何体かつみあがった死体が山を築き、そこから滴る血が、海になつていた。これは

ヤクザ間の抗争だった。その光景はまさに地獄絵図だった。しかしその中に血の滴

る刀を持って、無表情で立っている青年がいた。名前を”桐島きりしま碧斗あおと”

といった。そしてこの惨劇は全部この青年が所属する組の命令でやったものだった

。その横に歩いてくる人影があった。桐島は歩いてくるその人影のノド元に刀を向

けた。

「だれだ」

抑揚の無い冷たい声で桐島がいった。すると人影が、

「俺だよ俺、田中だよ。」

といった。人影は桐島と同じところに所属する、田中 直人、といった。すると桐島は

「お前か、仕事をした後の俺には近づくな。次は殺すぞ」

といい、それに対し田中は、

「おお、こわ。そんな恐いこと言わないでよ。それよりまた派手にやったねえ」。流石

はボスの懐刀だねえ。ム力つくくらいに。たくさん仕事をしてくれてたけど、そ

ろそろ邪魔かな、俺の出世にね。」

カチャリ、と音がしたとおもうと桐島に銃を向け引き金を引いた。バンツと音がして

桐島に弾が当たった。そして桐島は殺されるその瞬間も無表情だった。桐島が死ぬ直

前に、田中は、

「ふ、やっぱり死ぬ瞬間もボスの心のないのお人形は無表情なんだな。」

目覚めると真っ白い部屋に居て、目の前に小さな少女が居た。

「うん~~~~~殺されたのに殺された相手にも恨みを抱かない何て哀しい人生だね。」

シロイヘヤ（前書き）

今回はやったら会話が多いです。

シロイヘヤ

「う~~~~ん、殺されたのに殺された相手にうらみも持た無いなんてなんて悲しい人生だね。」

「.....」

そんなことを言われてもやっぱり碧斗は無表情だった。

「こんな子と言われても感じない？つまんないの」

「.....言葉遣いが間違っているぞ。なんて悲しい人生だねのところだ。なんて~~~~というならそこはだろうというべきだ。」

碧斗はそういった。それにたいして少女は、
「細かいねえ。ここに来たときに、ここはどこかと聞く前にそんなこといつてきたのは始めてだよ。ま、君みたいな経歴の人も初めてだけどね。」

そういった。やはり碧斗の表情は動かなかった。少女は溜め息をつきながらも説明した。

「はああ。まあ、いいわ、えつとあたしの自己紹介からしようかしら。わたしは・・・神です。主に人の運命と輪廻転生、世界を作ったり壊したりしています。そして、桐島 碧斗貴方は死にました。」

「.....」

「無反応とはいいい度胸ね。このままだと話が進まないから勝手に進めるわよ。えーとあなたは死にましたが生き返ることが出来ます。」

それを聞いた碧斗は困ったような顔をしながらこういった。
「俺はたくさんの人を殺したし、相手の大切な人も奪った。そんな俺に生き返って人生をやり直す資格なんてない」

それを聞いた少女は驚いたような顔をしながらこういった。

「あんたには”ころ”がない。
空はあると思うことがあっても事あっても空の青さが素敵だと感じる事はない。」

今日は寒いな明日は雪が降るかもしれないと思って、積もるかな、とおもうことは無い。
あなたは、人の温もりを感じることは無く、人への恨みも、人からの恨みも、憤慨も、悲しみも、楽しみも、憂いも、杞憂も、何も感じる事がない。そうですね？」

そついわれても碧斗は表情を変えずにいった。

「ああ、そついわれていた。」

それに対して少女はニコニコしながらこういった。

「全て分かっているよ。だって前にも行ったようにあたしは神だもん。あたしの気まぐれって言うのもあるけどやっぱり面白そうだからかな。」

おもしろそう、という事に疑問を感じたのながらも碧斗は、神

に聞いた。

「で、俺の転生先はどこだ？」

その言葉を聞いた神は、待ってましたといわんばかりの顔をして言った。

「あんたの転生先は唯一あなたの楽しんだゲームであるポケットモンスター - の世界です。今でも楽しむことは無くてもBWもってんでしょ。」

シロイヘヤ（後書き）

更新遅れてすいません

転生先は・・・（前書き）

更新遅れて申し訳ございませんでした。

転生先は……

碧斗が目を開けるとそこは空の上だった。空の上といっても浮いている

わけでもなく、降下していた。現在進行形で。

「……やばいな」

そう言っではいるが顔は全くヤバイと思っている様子も無くお決まりの

無表情であった。

碧斗は自分の身体を見てみるとふと、あることに気がついた。何故こんな

なときに自分の身体を見る余裕があるのだろうか。

「……体が、……透けている」

自分の手を通して下を見てみると下の景色が見えた。

「……これが魂という状態なのか……」

時は少し前にさかのぼる……

「面白そうだからって言うのはうそだろ」

碧斗はそう言った。神は苦虫を噛み潰したような顔になりながら言った。

「ち、ばれたか。その洞察力は褒めて使わす」

碧斗は顔色1つ変えずにいった。

「早く言えよ」

神はつまらなそうな顔を変え真剣な顔になり言った。

「実は、あなたの心が無くなったのは、人による訓練のせいではありません。私達神によるものです。」

神は一息ついてからまた話し始めた。

「正確には、私の仲間の神に遺伝子実験を施されたポケモンによるものです。その名も、ダークライ。ダークライは、研究員を殺し、研

究所

を破壊して、次元を超えて別の次元に行きました。

「それが、俺の世界で、次元を超えた先でたまたまであった俺の心

を、

奪ったってことか？」

碧斗は神の言葉をつないだ。

「そういうことです、すいませんでした」

神はそういつて頭を下げた。それに対し、碧斗はこういつた。

「悪いのはあんたじゃない。遺伝子操作したヤツだ。それより奪われた

おれのところはどこいったんだ？」

神は碧斗に感謝の意を表しながらいつた。

「ありがとうございます。あなたの奪われた心は一つの塊になりました

しかし、私がボッコボコのメツタメタにしてポケモンの世界にぶ

つこ
む過程で間違えて壊、悪あがきとして一つ一つの感情にばらして、
イツシュ地方の各地にばら撒いてしまったのです」

それを聞いた碧斗はいつた。

「前言撤回。全部神様のせいだな」

それを聞いた神様はしかめっ面になっていつた。

「ち、ちがうわよ、魔改造ダークライを作ったのは、あたしじゃないし

・・・は、」

神様は自分の状況に気づいたのか、オホン、と咳払いしていおう

とし

たが碧斗が、

「おい、だいじょうぶか？かおが紅いぞ」

それに対し神様はキレた。

「うるっさいわね、あんたのせいよ、すこしは黙って人かみだけとの話^を聞いてな

さいよ。」

神は、はあはあ、と肩で息をし、少し落ち着いてから話を再開させた。

「と、いうことであなはポケットモンスターの世界でパートナーを見つけ、一緒に心

を探してもらいます。」

それを聞くと碧斗は神に質問した。

「パートナーいなく「だめです」

と、神は話をさえぎった。

「質問はそれだけですか？」

それを聞くと碧斗は少し考えていった。（勿論無表情だ）

「なにかくれるものはないのか？」

それには神が驚いた表情で答えた。

「え、なにかほしいものがあるんですか？」

「いや、ない」

それを聞いた神は大きくずっこけた。

「な、無いならいわないでください。まあ、そういうなら私と直接会話できる携帯をあ

げます。あと、あなたが生前使っていた長ドスを渡しておきます。伸縮式にしますか

？」

「ああ頼む」

それを聞くと神は

「では先に携帯をさきにわたしておきますね」
と言い残し、突然出現した扉に入っていた。

カンカン、ドン、ガシャン、

また扉が出現してすすだらけの神様ができてきて長ドスを碧斗にわたしていった。

「ハイこれで伸縮式になりました。ために、縮め、と念じてみてください」

「ありがとう、じゃあ試させてもらおう」

「縮め」

キュイイイイイイン

と、音をさせながら碧斗の刀は持ち手を合わせて5センチほどまで縮んだ。

「これくらいいいですかね、では頑張ってください」

「ああ、いろいろありがとう。」

そついうと碧斗の体が消え始めた。

「あ、言い忘れましたがあなたを地獄に落とそうとする閻魔の手下には気をつけてくだ

さい。」

神の注意は碧斗には届かなかった。神は碧斗の体が完全に消えるといった。

「ちゃんと聞こえたかなあ。ま、大丈夫よねあの人なら」

そして冒頭の場面に戻る

碧斗の体は段々と大地に近づいていた。近づくにつれ下の様子が見えてきていた。

巨大な山脈が円形になっており一部から巨大な川流れていた。円の中は平地になって

いて所々森になっていた。平地の細部が見えてくるようになった頃、突然碧斗の気が吹っ飛んだ。

碧斗 side

目覚めると真っ暗で窮屈な場所に居た。その壁は押すと簡単に割れた。すると外に

は二足歩行の黒い狐がいた。その狐は俺を見るとこういった。

「オイ、一匹目が産まれたぞ。誰か来ーい。」

うまれたああ、そうか俺は卵を破ったのか。周りを見てみると他にも卵があった。卵

の殻を見てみると自分の顔が写っていた。先ほどと同じきつねに似ていたがもう少しきつねに近かった。

「ゾロア、か、」

転生先は……（後書き）

碧斗は色んなことを思ったり、言ったりしていますが無表情、無感情です。

碧斗の道具

携帯

折りたたみ式の携帯。神と即座に通信できる。普通の携帯としても使用可。

長ドス

碧斗が生前使っていた刀。神により伸縮式になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1045y/>

こころを求め

2011年11月20日04時12分発行